
陽気な午後、あるにぎやかな都会の喫茶店、真っ白なテラス席のポートレート

すいかちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽気な午後、あるにぎやかな都会の喫茶店、真っ白なテラス席のポートレート

【Zコード】

「N 8748」

【作者名】

すいかちゃん

【あらすじ】

ある都会の陽気な午後。素敵なおしゃべりの喫茶店の真っ白なテラス席で、4人の男女が話しています。
だけど、あれれ? 何かがおかしい。誰一人、相手の事を好いてはない。
人間、所詮エゴだもんね。そういう心理描写です。

(前書き)

誰かを馬鹿にしたことがあるアナタ
ぜひ読んでみてください
その誰かの気持ちが、ちょっとだけ分かつてしまふかも、知れませ
ん

だー、かー、らーあ、一人つきりなんですよ、最終的に！ 人間つて奴は。

街なんか歩いてるとな、友達いー、なんて言つて、連れ立つてゐる若い女の子とかいるでしょ？ ああいうの見ると、無性に腹が立つてくるんだよね。

あいつらバカだなあ、頭悪いなあつて。君も思うでしょ？

彼女らみたいなのは、言葉どおりに友情があるから連れ立つて歩くのか。

いやいやいやとんでもない。

何かしらの利害関係が一致しているからああやつてまとまっているわけなんですよ、なーんて僕なんかは思うわけです。何せ受験地獄つて奴を体感してますから。

僕は地元じやそこそこ有名な、厳しい私立高校の出身ですが、在学時は、人間のエゴやアラなんて、毎日のように見てきましたよ。もうみーんな、騙し安いのおとしめあい。ああおぞましいねー。もつとも、その環境でたつた一人耐えてきたおかげもあつてか、名門国立のキャンパスライフをエンジョイ出来たし、今みたいな？わりといい職にも？ 就けたんですけどね！

合格発表の時なんかはもうね、ボロ泣きですよ。男泣きです。こりやもういことは出尽くした、人生終わつていいんじやないかと……、あ、すみませんねえーつ。

今回の話の趣旨はそこじやありませんでしたね。

思わず脱線してしまいましたよ。いやあ面白い。

人間誇らしいことがあるとつい自慢したくなるのですな、はつはは。

所で君はどー大出身？ 私立大？ 聞いたこと無いなあ。まあいいか。

分かつてますつて話を戻しましょうねえ。全く最近の低学歴はせつかちで……いや、すまんすまん。なんでもないよ。ここだけの話！

そうそう、結局はエゴ、それなんです！

その事がわかるまで純真な僕は苦労しましたよー例えればですね……、

「ウザつ、ああいう風だから友達できなかつたんでしうが」
サオリはわざと半分しか瞼を開けないような、だるそうな眼をして、大声で笑っている実業家風の男をねめつけた。
じろりとした視線を投げかけることを、確か睥睨するつていうんだよね。

彼女の目はそんな感じ。取るに足らない存在をただ眺めているような、そんな目だ。私は絶対にあんな眼で見られたくないと思ひ。
彼女は美しい女性だ。

ウェーブの髪を明るく染め、派手なメイクと服をまとつて、いつでもキラキラ輝いている。

ピンク色のルージュを引いた半開きの唇に、細身のタバコをくわえてボーッとしている姿は、いつもここじゃないどこかについて考えているみたいだ。

私のいる世界には今までいなかつた、どこまでもおしゃれで垢ぬけた人。

「あんたもそう思つてしまふよ」

彼女は、深緑のシャドウとつけまつげに彩られたシャープな瞳を、私に向けてきた。女性誌のモデルか、昔買つてもらつたバービー人形みたいに綺麗な顔が、じつとわたしを見つめている。

まるで何かを試されているような。

やめて、そんな目を私に向かないで。

私はいたたまれなくなつて膝に手を落とす。「コーヒーは既に冷めてしまつっていた。

その様子を見て取つたサオリが鼻を鳴らすようにした。嫌だ、呆かれている。

「何下向いてんのよ。そんなにあたしといるの嫌?」

「そ、そんなこと無いよつ」

慌ててサオリに弁解した。

私みたいないとこなしの目立たない女が、美しい彼女の機嫌を損ねるような真似はしたくない。

特に、これから数年同じ職場で過ごさなくてはならない、今の間は……。

「あたしねー、ああいう奴がいつちばん大きい。人様の批判ばつかりしてるけどさ、結局、他の人と比べたら自分が上だつて言いたいだけじゃんね。自慢かよ。ほら見てよ、あの太鼓持ち」

彼女が、同じく冷たい視線を投げかけている先には、実業家にインタビューラしき事をしている青年がいた。決して気弱そうには見えないけれど、一生懸命ペニペニことご機嫌とりに終始している。

「ハハつ、かーわいそ。バカにされてやんの」

彼には意思というものがないのだろうか、気持ち悪いくらいに、笑顔を絶やさない。

実業家風の男性の自慢話は、いよいよ佳境に入つてきたようで、あまり上品とはいえない胴間声が、ガラガラと笑つている。

青年は、何度も頭を叩かれていて、それでも笑つている。

ああ、なんてかわいそなんだろう。

でも、アレくらい寛容な人だったら、もしかして私みたいな女でも受け入れてくれるんじゃないから……。

「あんたもあーゆーとこありそつうな感じすっからさあ、血口主張しながらやダメよー」

サオリはそう呟くようにしながら、タバコを始末した。

その声が、すぐに私を現実に引き戻す。

私は赤くなりながら、「わかった……」と消え入るような声で言つしかできなかつた。

彼女はキチンと携帯用の灰皿を使つてい。

彼女は一つ一つの持ち物が洗練されていて、うらやましい。

お給料は同じだけもらっているはずなんだけどな。やっぱり無駄遣いが多いのかな。

普段から美意識の高い人なのだ、彼女は。

本当に、本当に私とは大違ひ……。

クソッ……！ついでねえよ。

俺はいつまでこんなオッサンの話を聞いてなくちゃいけないんだ。俺がFラン大学の出身つて分かった瞬間からこいつは、前にも増して凶に乗り出した。

（学歴ばかり気にしてんじゃねエぞこのカスが！）

俺は、口をついて出そうになる罵声を、必死で噛み殺していた。こうやって頬に笑顔を張り付けていれば、めったなことは口にしないで済む。だが、そのかわり、表情筋が今にも引き攣りそうだ。そりや俺は決して頭がよかつたわけじゃないが、少なくともこいつもよりは幸せな人生を送っている自信はある。バスケ部では努力の甲斐あつてかいでもレギュラーだったし、女にもよくモテていた。ま、大学出るまでの話だけだ。この辺バスケチームないし。

ベタな話だが、高校在学中に何人の女と寝られるか、連れと競い合つたことだつてある。

もつともその勝負は、女の気持ちを酸いも甘いも噛み分けたこの俺の「圧勝」だつたわけだが。

こいつは多分、この年になつても、自力で落とした女などほとんどいないだろう。

ムカつくことに金周りはよきそうだから、童貞ということはあるまい。何よりも金を必要としている女だつて、中にはいる。

だが、こいつの持つている雰囲気は、とても異性を前にして堂堂とふるまえるものではないことぐらい俺にだつてわかる。

今、立場の弱い俺を屈服させていくように、いつでも金をちらつかせているわけだ。

大方、金と権力をを使えば、これまで無視されまくってきた他人を支

配できることに気づき、快感を覚えているのだらう。

本気でバカじやねーかよ。

そんな思いも口に出せず、ただ笑つてメモを取つてゐる俺に氣をよくしたのか、相手は俺の頭を叩きだした。

当人はスキンシップでもしているつもりなのだらう。メモの筆先がずれ、さつきまで書いていた文章に、ぐしゃぐしゃとした線が上書きされる。

べしつ、べしつ、べしつ……。

こいつは、さつきから人の頭をなんだと思っているのか。畜生。マジやつてらんねーよ。

こんな仕事はもう放り出して、さつと家に帰りたい。帰つて一発オナニーして寝てやる。

そういうや先週借りたAVまだ見てねーな。そろそろ返さないと。

……本当はAVなんかじゃなくて本物の女が抱きてエよ。社会人になつてから忙しすぎて、全然女と遊べねえから。向かいの席の女なんかいな、気が強そうで。モデルみたいな足してやがる。

ああいうのを組み伏せて、アンアン言わせてやりてエ。乳首に噛みついてよがらせてやる。

それで、最後には「アタシには俺しかいない！」なんて言わせてやるんだ。

そこを捨ててやる。……想像しただけでたまんねえな！
せっかく、人が気持ちよく妄想しているところに、視界を遮る物体があつた。

なんのことはない、モデル女の連れの不細工だ。

ああいう女を見ていると吐き気がする。

見るからに、自分の見た目に気を使つていらないタイプだ。

学生時代のクラスにも、ああいう女は何人かい。触れる気も起らなかつたが。

ああいうのをオタクつていうんだらう。

あの不細工女もどうせ同じだらう。ほさほさで染髪もしていない頭に、にきびだらけの頬はメイクすらされていない。

くすんで貧相なトレーナーとジーパンに押し込められた肉体は、だらしなく緩んでいる。

なんであんなきれいな子がこんなブスと一緒に過ぐしているのか。

「おい！聞いているのか？」

奴のガラガラ声で我に返った。

「あ、あああ、はいはい。聞いてありますともー。いやあ、本当に素晴らしい学生時代を送つてこられたようで、すごいですねー！僕なんか尊敬してばかりですよー！」

まるで美女と野獣だな、と、俺は心中で呟いた。

（むしろ刺身とシマか……）

「あ、あの、じゃあ私、もうほんとに用事あるし、帰るねっ！」

ミツ子は、その豊満（笑）な肉体からは想像もつかないくらい、素早く立ち上がつた。さつきからアタシにくぎ付けだつた太鼓持ち君が、視線を遮られて慄然とした表情を作る。

くううつ、たまんない！

例えミツ子相手としても、恋愛対象外のダサ男くんからだとしても。

どこかの男性が、自分と誰かを比較して、最終的に自分を選んだ瞬間つていうのは、どうしてこんなにも気持ちいいのだろう。

「えー、もうちよつと居なよ。そんなこと言つて、もしかしてデータだった？」

もちろん、そんなことひどくない、私はやんわりとミツ子を引きとめる。

けだるい眼差しと、嘘をとがめるような空氣を作るのも忘れない。

「え、いや、違うんだけど……」

ミツ子はまたしても蚊の泣くような声で、だが困り果てたような顔で固まった。

あーあ。ぶりっ子してもあんまり似合ってないんだけどなあ。やめた方がいいよそれ。

「何だ違うのか、やっぱりねーつ」

客観的に自分を見られないから分からぬのね。意地悪なようだけど、アタシは、ミツ子がこれだけ急ぐ理由を知っている。

彼女は重度の腐女子という奴だ。

現実の恋愛を放棄して、キラキラしたホモの絵ばかり追いかけているバカな子たちのお仲間。

職場では必死になつて隠しているみたいだつたけど、アタシは、彼女のケー・タイの待ち受けが、そこと人気のある少年漫画のヒーローだつてことを知つてる。

今日はそのマンガの劇場版が公開されるらしい。それもミツ子が、やけに気にしていた昨日の新聞の広告で知つた。

てか職場でまで妄想すんなよ恥ずかしい。

大手出版社から出でているマンガだから、公開日に行けば、ファンのために何かしら特典が付いてくるに違ひない。

マンガに恋する哀れなミツ子は、どうしてもその特典が欲しくてたまらないはずなのだ。

もうすぐ始まっちゃうアニメが、どうしても見たいんです。

素直にそう言つちゃえば許してあげなくもないのにねー。

ネタとして、職場で発表させてもらうかもだけ。

そう、それにアタシは見た。

質素なトートバッグの中に、何冊かそういう本が入つていたのも、残業の次の朝、机の下の屑かごにそのキャラクターの落書きが放り込まれていたことも。

やけに切れ長の目をしたそのキャラクターは、もう一人、よく知らない少年キャラクターと密着し、濃厚なキスを交わしていた。

確かにイラストは上手かつたが、所詮、マイノリティな趣味だつて事は変わらない。

そのイラストが今、肩かこから救い出されて、アタシの手の内になると知つたら、ミツ子はどんな顔をするだろ？

「あ、あの、ホントに今日はありがとう……」

それはそうと、ミツ子も彼女なりに、知恵を使って生きているみたい。

蚊の鳴くような上ずつた声だけど、下手に出でたしの機嫌を伺い、さつむと帰りうとしているのが、よくわかるもの。

でも、駄目えー。

アタシはいま、無性にあなたをいじめてみたい気持ちになつてているの。

だって、さつきはあなたも太鼓持ち君の事を情けないつて思つてたんでしょ？

なのに、わざわざ自分から同じような行動をとるのは、どうなんだろ。ねえ？

「は、早くしないとあ……」

普段は、おひとりを通り越してスローペース過ぎるミツ子の声だけど、（人によつてはイライラを募らせていくはず）今はさすがに焦つているのが手に取るよう分かる。

人の感情を思つがままに操るのは、正直、楽しくて仕方がない。

「じゃあ、ミツ子つてさ、今彼氏いないんだよね。例えばさ、あの太鼓持ち君なんてどうかなあ。ああいうタイプつて、必ず疲れて帰るから、ミツ子みたいな包容力あるタイプ、好きだと思うんだけどなー」

アタシは思つてもみないことを発言するのが得意な方だ。

バーカ、どうせ上手くなんか行かないよつて思いながら、平氣で相手を励ますことが出来てしまつ。

それでも純真（笑）なミツ子は、頬を赤らめて一生懸命否定するのだ。

ハハ、いじらしいじらしい。

……アタシは絶対こんな風には生きない。

折角女として生まれてきたのに、美しさを武器にせず、わがままで人を操らない人生なんて、絶対に乐しくない。

今のアタシには幸い、素敵なパトロンがいてくれている。

まあ相手は上司で不倫なんだけど。

彼氏も他にちゃんといるんだけど（笑）

少しのリスクで、自らのお給料以上の生活も、樂々手に入れることが出来るのだ。

そうね、お金があるんだつたら愛がなくても……そう、太鼓持ち君を怒鳴り散らしてゐあいつでも、別にかまわないかもね。

何としても、この楽しさを手放してなるものか。

残念だけどミニッ子、あんたがいまさらこいつの生き方をしようつたつて無駄よ。

それでも、あなたはアタシと徹底的に比較されて敗北感を味わうべきなの。

オタクの世界にこもつて戦線離脱した気になつてゐるなんて、甘すぎる。

さ、今日は絶対に帰してなんかあげない。

これを機にオタクなんかやめた方がいいよ。イメージ悪いし（笑）

アタシは猫のように目を細めて、口角を上げて笑顔を作つた。

「ね、もうちょっとだけ話そりょ」

（てか、はよ帰れつつの）

店番のおねーちゃんは、誰も見ていないのをいいことに、思い切りぶーたれた顔をしていた。

道路に面した店のテラス席には、今四人の客しかいない。

男二人のグループと、女二人のグループだが、おかしなことに、どちらも仲良しには見えないのだ。

しかも、それぞれ、少しずつうつ屈がたまつてゐるらしく、ビリとなく険悪な雰囲気だ。

会話の全く聞こえない店の中からですら分かるくらいだから、当然

外からの客も寄り付かない。

店番の私の気にもなつてみるつて。

折角お団子へア決めてきたのに、誰もほめてくんないし。

バイトのおねーちゃんは、深くため息をついた。

「あーあ。誰かこんな状況、ぶち壊してくんないかなー」

その時、実業家風のオッサンがいきなり激昂し、地面にグラスを叩きつけた。

パリ
ン！…という、小気味の良い音が、店内にも響いて来た。

「ちょ、お、お、お密さんツ…！」

おねーちゃんは慌ててテラス席に走つていいく。

数刻前。大陸半島の北半分の国では、核爆弾を積んだミサイルが打ち上げられていた。

エゴばかりで自分たちの言い分を聞かない、なまいきな隣国を押しつぶしてやれという機運が、急激に膨れ上がった結果であった。
一度、東の島国の上を通過して太平洋に落ちてしまったこともあるミサイルである。

その島国の偉い人が気付いた時には、すでに手の打ちようもなく、ミサイルは目的地に到達する寸前であった。

田標は、由いテラス席が自慢の喫茶店がある、あの町。

「さ、貴様はツツ…。これ以上僕を馬鹿にするどビうなるかツ！」

「うつせ！この童貞糞オヤジ…！」

「お、お、おじさん、やめてあげてください…！」

「不細工は黙つてろやア…。なんだよオこのドブス…！」

「…（サオリのうそつき…）」

「ぶくぶく…（不細工だつてwww言われちゃつたねwww）」

「どビうせ貴様もあの馬鹿女共と同じだ！底辺だ…！ビッチ

だ！！！」

「へ？ だ、誰がバカ女よつ！！！ ああんツ！？ 犯めて
んのかてめH…!! 」 こちは今からすぐに金ちゃんの映画見なきや
いけないのよツー 古ちゃんと結ばれるか見届ける義務がくあ wせ
d r f t g yふじこ……」

「（覚 w w 醒 w w w し w w w w w た w w w w w ）」

「ちょっとお客さん達！！ いい加減にしてくださいよツー いや
だつお団子引つ張らないで」

「部外者は引っ込んでるよつ！」

「店員にだけ高圧的な男つてどつかと思ひ。正直デン引きなんだけ
どお w w」

ミサイルは、既にこの町の上空、肉眼で確認できるといひまで飛来
してきてこる。

彼らの視界が白く染まるまで、もう三〇秒の猶予もない。

(後書き)

私が、一人暮らしを始めてから一年間、2019からは、本当にたくさんの中を頂いてきました

寂しい時の笑える話とか、真面目な話とか、好きなアニメに湧き出るアンチ達とか

2019は、所詮便所の落書きとさげすまれている場所ではあります。が、本当にたくさんの人間が、それぞれ自分なりの考えを持ちよつて始めて成り立つ場です

沢山の意見がある、だからこそ面白いと思いませんか？

さて、2019でも、現実世界でもよく見る主義主張達を、ステレオタイプ化したキャラクターたちが実在したとします。そんな彼らを現実の町に放り込んでみたら、一体どうなるんでしょうね？

自分はこうしました

つていうのはただの建前で、最後の数行が書きたいがために書き上げました よろしくお願ひします

なお、この作品を完成させた際に、宣伝効果を狙い、複数の、不特定多数の方が閲覧する可能性のあるサイトに、リンクURIを張りました

後に、別の掲示板の方で、これはマルチポストと呼ばれるマナー違反行為であるという説明を受け、納得いたしました
もし、同じ内容を何度も読まれた方がいらっしゃったら、不快な思いをさせてしまったかと思います

本当にごめんなさい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8748/>

陽気な午後、あるにぎやかな都会の喫茶店、真っ白なテラス席のポートレート

2010年10月16日10時56分発行